

棟梁・松田インタビュー

●松田スタイル：手、道具、修行



阪本：松田さんのその職人の手をモチーフにしたいなっていうのがありましてね。(松田さんの手を)写真撮らせてもらっていいですか？

松田：ああ、はい。(デジカメにて手を撮る。)

阪本：この手で色々な物を持って来られたと思いますが、1番得意な道具は何ですか？

松田：昔ながらの工房でやっている大工は手道具でやっている人いますが、最近はノコギリも鉋(カンナ)もたいていの道具は機械ばかりなんです。昔は鉋でいかに薄く削るかを仲間同士で競い合ったりしましたけどね。

阪本：親方からどうやって仕事を教わったんですか？

松田：ああ、目で見て覚えました。仕事は盗むもんだって教えられていましたから。

阪本：「職人の世界は教わるんじゃなくて、盗んで覚える」って、よくドラマなんかでも聞きますけど。やっぱりそうなんですか。

松田：親方は直接教えてくれません。違う大工さんが教えてくれたことはありますけど。道具の手入れ1つにしても、口で教わってもあまり分からないんですよ。自分で試行錯誤しながらやっていくうちに「あ、こういうことか」と分かる。「会得する」という感じなんですよ。鉋なんかは自分が納得できるように使いこなせるまで、だいたい3年かかりますから。

阪本：3年ですか……。

松田：今はそういう仕事が減ってしまって、その技術を使う場がないのが残念です。それと、昔の大工は道具を人に見せなかったですね。貸し借りもしませんでした。

阪本：自分の体の一部みたいなものだったんですね。

●松田スタイル：原点

阪本：実は当初、お目にかかるまで、「棟梁」と聞いて、角刈りの松田さんを勝手にイメージしていたんです(笑)。ところが松田さん違うじゃないですか。昔は角刈りだったんですか？

松田：いや、昔から私の場合はこの髪型でした。格好もいわゆる大工さんではなかったですね。

阪本：親方はうるさくなかったですか？

松田：最初の頃は「いい加減髪の毛切れ」とか、「いつまで伸ばすんだ」とか言われましたけどね(笑)。

阪本: いくつかの時に弟子入りしたんですか？

松田: 17 歳です。高校を中退して、横浜の親方のところに最初はアルバイトで入りました。そのころは親方は角刈りにニッカポッカの上下で、足袋というスタイルでした。

阪本: 親方は木造専門の大工さんだったんですか？

松田: そうです。私は横須賀出身なんですけど、地域によって仕事の方法の違うことがわかって面白かったです。

阪本: どういうところですか？

松田: 骨組みの組み方や木と木をつなぎ合わせる方法、梁(ハリ)を渡すことを「梁をふせる」と言いますがそのやりかたなんかも違います。

阪本: 組み上がった時、外から現場を見て、その地域の違いってわかるものですか？

松田: 関東と関西とか、広い範囲だと結構違うので分かりますね。

阪本: 私は鉄骨ばかり見ていたから(＊)、松田さんのような木造職人の世界を知らないんですけど、17 歳で親方のところに入って、一人前になるまで何年くらいかかりましたか？



＊ 註：阪本は会社員時代、鉄骨造に使う軽量コンクリート(ALC)の営業マン

松田: 7 年です。一応卒業というか。

阪本: その時って親方から「君、卒業！」とか言われるんですか？ 卒業証書みたいなものってあるんですか？

松田: あ、のこぎりくれましたね。たぶん昔は一人前になったら親方が道具をあげるという、大工の中の習慣みたいなものがあったんでしょうね。

当時は、階段と長押(なげし)ができるようになったらだいたい一人前とみなされていました。

阪本: 階段というのはどんなタイプの？

松田: どんなんでも……。

阪本: 大工さんって計算ができないといけないですね。

松田: ええ、まあ。掛け算、割り算、三角形の出し方とかはできないと合わなくなっちゃいますね(笑)。

阪本: 17、18 歳のころっていろんな誘惑が多い時期じゃないですか。よく辞めずに続けられましたよね。親方とはどのように出会ったんですか？

松田: 元々おふくろと知り合いだったんです。私が高校を中退してプラプラしていたので……。

阪本: それでお母さんが、「うちの息子なんかしてくれませんか？」という具合だったんですか？

松田:いや、私はその場にいなかったからどういう話したのかはわからないけど(笑)。高校に通っていた頃からその親方にアルバイトで使ってもらっていたんですよ。

阪本:なるほど。そのころからその道に入ろうと思っていたんですか？

松田:いや。全然そういうつもりではなかったんです。



阪本:何をやりたかったんですか？

松田:1971年のあのころは、仲間で自給自足の生活をしようとか、ベトナム戦争真っ最中で、地元横須賀の仲間と反戦のコンサートなんかをやっていました。横須賀にロック喫茶があって、よく出入りしていました。ベトナム戦争に行っているアメリカ兵たちもそこへ来るので、友達になったりして。そこで「次ベトナムへ行ったら帰ってこれるか分からない」。なんていう話をされたこともあります。

阪本:生々しいですね。

松田:バラバラになってしまった戦死体を集めて1つにするというアルバイトが当時ベースキャンプの中にあつたと聞いたことがあります。実際にそのアルバイトをやったという人には会ったことはないですけど。

阪本:きっと実際にあつたんですよ…。時代の気分としては、あの頃は熱かったですよね。

松田:そうですね。ただ、そういう人間はほんの一握りだったので、世間にはまだまだ理解がなくて、変人扱いされましたね。今は環境問題に取り組むことがおしゃれな感じにさえなっているけれど、あの頃はこいつ何言ってるんだ？っていう感じでしたよ。

●松田スタイル：環境

阪本:そのころから環境に対する意識をお持ちだったんですね。

松田:そうですね。あのころはみんな精神世界の本を読んだりしていましたよね。本と言えば、仕事で親方と話をしている、分からない“ことわざ”や分からない言葉なんかがあって、柳田國男の本に一時はまっていました。

阪本:『遠野物語』とか？

松田:ええ。『木綿以前の事』とか、『火の昔』を読んで、親方の言っていることがようやく理解できたんです。ことわざなんかも結構建築用語が出てくるんですよ。

阪本:それはどんな？

松田:たとえば「束の間(つかのま)」。束って、家の床下で、平行材である大引きを支える短い角材のことを言うんですが、束の間(あいだ)は短いところから、あつという間という意味に使われたんですよ。普通そういう語源でわからないじゃないですか。

阪本：へえー。知らなかった！

松田：それまで本なんて読まなかったんですけど(笑)。高校でも勉強をあまりしなかったし。大工の世界に入ってから、本を読むようになりましたね。

阪本：一方で工場で部材を製造して現場では組み立てるだけというプレハブな建築の流れがあり、その一方では松田さんがやられたような、1つずつ作っていく手作りの建築がある。2つの相反する流れの中におられたわけですが、そういうことで影響を受けたことってありますか？

松田：民家に興味を持つようになったんです。こういう家に住まなきゃ駄目じゃないかって。障子ができて、日本人の生活が明るくなったっていうことを柳田国男も本の中で書いていて。

阪本：ということですか？

松田：それまでは雨戸だけだったんですね。

阪本：なるほど。外と内を分ける間に障子というものを作ったと。

松田：月夜がありがたかった時代があったという話を聞いて。今の子に月夜がありがたいか言ってもピンと来ないと思いますけど、私が子供のころはポツリポツリ街灯があるだけで、本当に月夜はウキウキして外に出ましたよね。そういう家の生活の中で時代に合わせて変化してきたことに興味があったんです。ハウスメーカーは一部ですが仕事に関わったことがありますけど、最初からあまり興味がありませんでした。ほとんど工場で作ってきて組み立てるというやり方で。

阪本：わかります。縁側もそうですけど、外と内の「曖昧」な部分ですよね。ホームビルダーの建物にはそれがない。はっきりとしてますよね。ここから先は内、外って。松田さんの背景にはそういう経験があるわけですね。

松田：あとは、お寺なんかにも興味があって仏像や古い日本建築を見に行ったりしていた時代があります。

阪本：そこで感じるものってありますか？

松田：ありますね。空気というか。神社とかも木の中にいると。

阪本：お気に入りの場所を教えてください。

松田：「那智の滝」の上流。滝の上ですね。滝を下から見るのではなくて、滝の上を歩いていけるんですよ。そこにはほかにも滝があって。杉の大木が倒れていたり、ほとんど人が入っていないような自然のままの場所なんです。

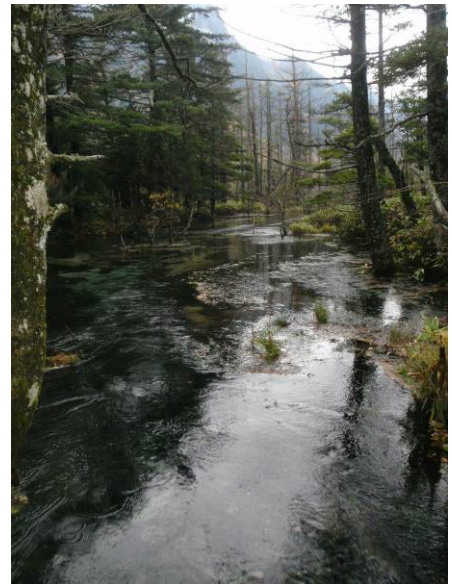
阪本：いいところですね！

松田さんはずっと大工一筋でやってこられたんですか？

松田：大工をやりつつも「木地師」になりたかった時期がありました。

阪本：キジシってなんですか？

松田：椀や盆等の木工品を作る職人のことです。奈良の十津川村の近辺がこけしなどを作るので有名なんです。もともと椀やなんかを作っていて、ここから全国へ木地師が広がっていったようです。その全国に広がった木地師を何箇所か訪ねてまわったことがあります。



阪本:へえー。山の中ですよね？

松田:はい。1回富山へ行ったときはもう作っている職人がいなくなっていました。

阪本:えっ？とりあえず富山へ行って見たということですか？

松田:はい。本を見て。色々話を聞いたら、戦時中はプロペラの軸を作らされたとかいう話も聞きました。

阪本:なぜ「木地師」に惹かれたんでしょう？

松田:なぜでしょうね。

阪本:それはいくつぐらいの事ですか？

松田:20歳ぐらいです。大工の修業中でした。そういう機織りや民具が好きで興味があったんですよね。今も木地師はいるし、こういう伝統はつながっているんです。

阪本:実際に門をたたいたことはあるんですか？

松田:それはなかったです。とにかく話を聞きにあちこち行きました。今でも好きなんですけどね。

●松田スタイル:音



阪本:先日2階を見学させていただいたときに太鼓があったんですけど、演奏されるんですか？

松田:「ジャンベ」ですね。西アフリカのマリの楽器で400年前ぐらいに作られた楽器なんです。詳しくは知りませんが、王国から始まって、後にキューバなんかへ伝わったようです。

阪本:400年前といえば、日本だったら江戸時代が始まるぐらいですね。始めたきっかけはなんですか？

松田:30年ぶりに反戦仲間とたまたま再会して、その友人がジャンベをやっていると聞いてワークショップへ行くようになりました。それがきっかけです。

阪本:独特のいい音ですよね。演奏はどこでするんですか？

松田:普段は公園だったり、仲間とワークショップへ行ったりしてたたいています。どっかの学者さんが母体の鼓動の音と似ていると言っていました。

阪本:ははあ。それでジャンベの音を聞くと安心するんですね。

●松田スタイル：自然な美

阪本：松田さんは、柳田国男からきた系譜の中で、民具とかそういうものに興味を持たれ、その要素が、ご自分で仕事ににじみでていると思われるところはどんなところですか？

松田：なんとなく……ですね。民芸、美に対する意識だったり。

阪本：この事務所の建築というのはそんな松田さんの家に対する理想を現実にしたものだと思うのですが、どうですか？

松田：そうでもないですけど(照)。居心地がいいことは確かです。新建材を使っていないから梅雨時なんか湿気、ベタベタ感がなくカラッとしてるんです。

阪本：確かに。それはどうしてなのでしょう？

松田：柱1本で、ビール瓶3本分の湿気を吸ったり吐いたりする機能があるんです。

阪本：へー！！柱1本で！日本の家で何がイヤってその湿気ですもんね。



松田：そうなんです。新建材は水分を吸わないんですよ。床の新建材は特にベタベタを感じます。

阪本：この吹き抜け感とか床が最小限しかないところもいいですよ。当初どんなプラン、思い、でこのオフィスを建てたのですか？

松田：最初は土間が欲しかったんです。土間暮らしで1階を生活空間にしたいと思ひまして。2階は事務所。結局色々なことを考慮した結果、その逆になりました。

阪本：屋根緑化もですか？屋根の上にススキとかも生えているんですよ。そのうちトマトとか育てたりして(笑)。

松田：いやいや(笑)。

阪本：こういう家を作るにあたって、お客さんからプランをもらって実現するために考えますよね。どこに力を入れたのですか？

松田：あんまり力を入れていないんです。でも手抜きはしていません。気は抜くけど(笑)。関わったみんなが楽しく作れたことが何よりですね。みんなからどんどんアイデアが湧いてきて。

阪本：楽しいとは思いますが、みんながこうしたいあほしいという案があって、よくまとまりましたね。バラバラにならなかったんですね。

松田：意見がバラバラになることはなかったですね。みんなが無理をして意見をあわせたんじゃなくて、自然の流れでより良い方向へ進んで行ったという感じでした。

阪本：ここの家ができるまで気持ちとか環境とかどんなふうになりました？

松田：本当に毎日幸せだな、自分は生きているなと実感できています。とどまるところが出来たせいなのかかわからないんですけど

どね。家を作るときはお客さんにもそういう風感じてほしい！と願って作っています。

阪本:家という高価な買い物をするにあたり、展示場でじっくりものを選んで、あとは予算内で……。それで終わりだと思っている人って多いんじゃないでしょうか。

●松田スタイル：シンプル

阪本:家を会社に行っているのに、生活臭は感じられないですよね。もともとのお二人の生活そのものが自然でシンプルなんだろうね。

松田:私は大工道具以外の「物」ってほとんど持っていませんから。昔から所有欲がないんですよ。なんででしょうね。捨てるものを持たないからでしょうか。捨ってくるのとかは好きですけど(笑)。

阪本:どんな物を？

松田:ゴミとか、石とか(笑)。職業がら、解体現場やなんかで使えると思ったものを拾ってきてリメイクして使っているんです。イス、テーブル、木の冷蔵庫とか。若いころ読んだ本や周りの環境の影響をかなり受けていると思いますね。

鈴木大拙、ブッダの言葉、お経、般若心経といった、仏教書から影響を受けたことも大きかったと思います。



阪本:般若心経いいですよね。たった 200 文字くらいでね。私も空にいる母に向かってよく唱えていました。

●松田スタイル：これから

阪本:これからどういう仕事をしてみたいですか？

松田:気持ちのいい仕事をしたいですね。居心地が良くて、安心感もてる、美しい家を作りたい。

阪本:松田さんのいう安心というのはどういうことですか？

松田:五感で感じるものです。私は五感や直感で判断することが多いんです。左脳が働かないというか(笑)。美しい家を作りたい。美しいというのは、私の中でとても重要な要素なんです。それは「チラチラ」している美しさではなく、「目にやさしい」美しさのことです。

阪本:クターっとしたいところでもんね、家って。いやー。松田さんワールドは奥が深くっていっぺんに引き出せませんね。

松田:すみません。口べたなんで……。

有限会社 松匠創美

<http://hayama-ie.jp>

〒240-0112 神奈川県三浦郡葉山町堀内 766-3

TEL:046-876-3275 FAX:046-876-3276